

青春時代、胸に刻んだ使命感



獣医学専攻
獣医繁殖育種学研究室

前多敬一郎 教授
Keiichiro Maeda

これまでの人生を振り返ると、いくつかの偶然がまるで運命の糸で手繰り寄せられるようにして、今、自分はここにいるのだと思うことがあります。しかも、私を導いた偶然のほとんどは人との出会いでした。

大学2年のとき、畜産獣医学科への進学を決めたのも、たまたま望月公子先生が進学ガイダンスをしている声を耳にしたからです。廊下を歩いていると、聞こえてくるのは「麻雀」、「酒」という言葉。どちらにも目がなない私はつい教室に入り、気がつけば望月先生の話に聞き入っていました。「牧場での臨床実習は授業が終わったら麻雀して酒を飲み、翌朝早く、また農家に実習に行く。君たちにそんな体力はあるか」といった話にすっかり感心し、「これはいい。私にぴったりだ」と、獣医になることを決意しました。

4年になった頃には酪農が盛んな北海道で産業動物の獣医として働くつもりでした。それが一転し、大学院に進んで研究者としての道を歩み始めたのもやはり

出会い。4年の夏、臨床繁殖学の集中講義があったのですが、農林省の畜産試験場（現・農林水産省畜産草地研究所）から来られていた森純一先生の講義がとにかく面白く、興味を惹かれました。このとき森先生が熱く語られた牛の不妊治療の講義を聞かなければ、今頃、私は北海道で獣医をしていたでしょう。

大学院でよく学び、よく遊んだ時代も忘れられません。とりわけ一昨年に亡くなられた森裕司先生との出会いです。お互い、まだ20代。私にとってはまさに兄貴のような存在で、森先生と附属牧場で新たな研究分野に挑んだ日々は貴重な財産です。附属牧場は私にとって青春の象徴であり、心のふるさと。今も附属牧場に行くと、不思議と気持ちがなごみます。

思えば、私が出会った方はみんな「自分の研究は人間の食を支えている」という強い使命感の持ち主でした。農学部に進んで以来、私もそれを胸に刻んできました。そして、そのような使命感を若い研究者に伝えていくことが私の役目であると思っています。